

体外受精により出生した児のアンケートによる 1 歳半までの予後調査

One year and a half follow-up study of IVF children

尾形 龍哉<sup>1</sup>・幸池 明希子<sup>1</sup>・今田 絢子<sup>1</sup>・水野 里志<sup>1</sup>

片岡 信彦<sup>1</sup>・古武 由美<sup>1</sup>・藤岡 聡子<sup>1</sup>・森 梨沙<sup>1</sup>・井田 守<sup>1</sup>・福田 愛作<sup>1</sup>・森本 義晴<sup>2</sup>

Tatsuya OGATA<sup>1</sup>, Akiko KOUIKE<sup>1</sup>, Junko IMADA<sup>1</sup>, Satoshi MIZUNO<sup>1</sup>, Nobuhiko KATAOKA<sup>1</sup>,

Yumi KOTAKE<sup>1</sup>, Satoko HUIJIOKA<sup>1</sup>, Risa MORI<sup>1</sup>, Mamoru IDA<sup>1</sup>, Aisaku FUKUDA<sup>1</sup>,

Yoshiharu MORIMOTO<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IVF 大阪クリニック, <sup>2</sup>IVF なんばクリニック

<sup>1</sup>IVF Osaka Clinic, <sup>2</sup>IVF Namba Clinic

【目的】

近年、生殖補助医療(ART)による出生児の増加に伴い、その児への影響に関する調査の必要性が指摘され、様々な視点や規模での解析が行われている。当院でも、ART による出生児について独自に継続的調査を行っており、今回 1 歳半までの身体発育調査について報告する。

【対象・方法】

2009 年 1 月から 2010 年 5 月の間に新鮮胚移植及び凍結融解胚移植を施行し、473 児が出生している。出生時アンケートで今後の発育調査に協力すると回答が得られた 198 児(新鮮胚移植 85 児、凍結融解胚移植 113 児)を対象とし、身体発育について解析を行った。

【結果】

出生時及び 1 歳半における凍結融解胚移植児 (FET 児) は、新鮮胚移植児 (ET 児) に比して有意に体重が重く ( $3155.7 \pm 406.3$  g v.s.  $2973.0 \pm 298.4$  g,  $10.7 \pm 1.2$  kg v.s.  $10.2 \pm 1.0$  kg)、身長も同様 ( $49.3 \pm 2.2$  cm vs  $48.5 \pm 1.7$  cm,  $81.0 \pm 3.1$  cm vs  $79.7 \pm 2.4$  cm) であった。また、出生直後には先天異常を指摘されなかった児でも、発達過程において、新鮮胚移植で 4 児(心室中隔欠損症、先天性股関節脱臼、内足及び足首関節異常、脳室内嚢胞)、凍結融解胚移植で 4 児(鼠径ヘルニア及び臍ヘルニア、鼠径ヘルニア、停留睾丸及び臍ヘルニア、舌小帯短縮症)に先天異常が判明した。新鮮胚移植及び凍結融解胚移植の先天異常率は、出生時 2.4 % (2/85) と 4.4 % (5/113)、1 歳半 7.1 % (6/85) と 8.0 % (9/113) であった。

【考察】凍結融解胚移植児の体重と身長は出生時および 1 歳半において新鮮胚移植児を有意に上回った。出生後の先天異常率は一般に 1 歳で 2~3 倍に増加するといわれており、今回もその範囲内にあった。発達過程において新たに 8 児の先天異常が判明したことから、追跡調査の必要性が示唆された。